

定本版

山本有三全集

第六卷

編纂

土屋文明

高橋健二

*

題字

土屋文明

風

.....
© Hana Yamamoto.
1976. Printed
in Japan.

乱丁・落丁本は、ご
面倒ですが小社通信
係宛ご送付下さい。
送料小社負担にてお
取替えいたします。

発行所 株式会社 新潮社
〒100 東京都新宿区矢来町七一
業務部・〇三二六六―五一
編集部・〇三二六六―五四
振替東京四一八〇八番
印刷所 二光印刷株式会社
製本所 神田 加藤製本

著者 山本有三

発行者 佐藤亮一

昭和五十一年十一月二十日 印刷
昭和五十一年十一月二十五日 発行

定価三〇〇〇円

山本有三全集第六卷

山本有三全集第6卷
目次

風

「作者の言葉」など

編集後記

高橋健二

四〇五

三九五

五

山本有三全集第6卷

風

目次

二つの事件	八
女中の恋	二六
最大の侮辱	六二
一度、ただ一度、そしてただひとり の人に	九〇
第一の死体	一〇六
女中の病氣	一三四
姉妹	一五五
容疑者	一六七
他人のめし	一八七
悪心なき悪心	二五五

太陽をおおうもの

二四五

毛髪の断片

二五三

殺人者

二六三

別離

三〇三

その夜

三三〇

一つの反抗

三四八

自然は真空をきらう

三六一

生活の川

三七六

二つの事件

一

突然、パンとピストルを発射したようなものすごい音が、黒い空気をゆすぶった。運転手はしまったと思った。

とっさに彼はクラッチを切り、ブレーキをかけた。

すると車はとまった。

彼はすぐ下に飛びおりた。

「だんな、すみません。パンクしちゃったんで。」

客は寝ているのか、シートに横になったまま、なんとも言わなかった。

これはかえってつごうがいいと運転手は思った。

「なあに、すぐです。五分か、せいせい十分あれば大丈夫です。どうかちょっとご辛抱なすってください。」

運転台のシートの下に首を突っこんで、修繕用の道具を取り出しながら、彼は捨てぜりふを言う

ように口を動かしていた。

それから、手ばやくジャッキを車台の下にかつて、フロント・ホイールを浮かせ、タイヤの内がわを締めつけてあるクリップ・ボルトを手さぐりで見つけて、タイヤ・レヴァをやっとそいつに引っかけた。

ヘッド・ライトが無用に前方を照らしていた。でこぼこの道が一条、昼のようにくっきりと車台の前に浮き出ていた。そこだけがバカバカしく明かるいので、ほこりで白くなっている草が、微風にゆるく動いているのさえ、しやくにさわるほど、はっきり見えていた。

ところが、その反動で、タイヤのあたりはひどく暗かった。車台の黒いエナメルに負けないほど暗かった。そのため仕事が非常にやりにくく、四つのクリップをはずすだけでも、容易なことではなかった。

こういう場あい、ナショナル・ランプが何かありさえすれば、わけはないのだが、そんなライトの用意なんか、流しの円タクが持っているはずもなかった。

しかたがないから、彼はやみの中でクリップを手さぐりしては、レヴァを引っかけて一つ一つ抜き取っていた。

その時いなすまのようなものが急に流れてきた。クリップも、タイヤも、車台も、彼も、すべてが、ぱっと光の中に立った。

すっかり仕事がらくになった。彼はハンマでタイヤをたたくと、案外、手がるにタイヤもリム（輪周）もはずすことができた。それから彼は車台のうしろにまわつて、スベヤーをおろそうとすると、たちまち、また暗黒の中に置きざりにされてしまった。

と、新型のフォードのセダンが一台、すばらしいスピードで反対の方向にすうと走り去った。

「やい、まぬけめ。こんないなか道で、何をまごまごしているんだ。しっかりしろい。」

と、その自動車は言っているように見えた。そして冷笑するような警笛の響きといっしょに、いやというほどほこりをあびせかけて行つた。

彼はそのため二、三度、たて続けにくしゃみをさせられた。

「ちくしょう。」

手の甲で鼻の下をこすりながら、いまいましうに疾走し去つた車のほうをにらみつけた。しかしテイル・ライトの赤い光さえ、もうやみの中に吸いこまれていた。

二

「助手がいないと、こんな時には、みじめだなあ。」

と、運転手は思った。

大きなずうたいをしているだけに動けなくなつたとなると、自動車なんてものは実際だらしのないしろものだった。

彼はまごまごしながら、それでもどうにかこうにか、スベヤーをおろして、そいつを車輪にはめかえていた。しかしリムが曲がつているので、なかなかうまくはまらなかった。彼はハンマでコインコーン、リムをたたきはじめた。するとその音が、道路の上にいっぱいにおおいかぶさっている両がわの太いエノキのこずえにぶつかつて、おそろしく大きなかたまりになつて地上にはね返つてきた。

暗さは暗し、場所が場所だけに、彼は少し気味が悪かったが、しかし深夜のパンクには慣れているから、そんなことでびくびくするようなことはなかった。早く仕事をかたづきたい一心から、彼

は一層ハンマアに力をこめた。

と、道ばたに水たまりのどぶか何かがあるのだろう。草の茂みにほうり出した破れたタイヤの下あたりに、カワズがふた声、み声、グエー、グエーとちいさく鳴いた。

彼はその声を聞くと、バカにさみしくなってしまった。明けても暮れても、アスファルトの上ばかり走っているものにとつては、カワズの声なんてものは、まるでちがった世界の声だった。

こんな車で遠く走りなんかするんじゃないかな、と、彼は急にそんなことを考えたりした。ひと晩ぶんのかせぎはどうやらあげたんだから、今夜はもう切りあげてもよかったんだが、道ばたで右の手があがると、つい商売意識でひとりでに車がとまってしまふのだ。

「おい、吉祥寺（きちじょうじ）まで。」

「吉祥寺ってえと、あの駒込（こまごめ）の……」

「バ、バカ言え。」

お客は酔っているらしく、ろれつがまわらなかつた。

「ああ、あの井ノ頭（いのかしら）のある……」

「き、きまつてら。値はかまわないから早くやれ。」

吉祥寺までなら、どんなにしたって二円。いや、値はかまわないって言うんだから、二円五十銭……三円。そうだ、三円と吹っかけてもいいだろう。何しろ、もう一時だ。それに飛ばすんだからな。

彼にとつてこないお客はなかつた。だから道の悪いのもかまわず、二十五マイルのスピードでびゅうと飛ばしてきたんだ。実際パンクさえしなければ、今夜ぐらいいい晩は近ごろありやなかつた。——しかし、まあいいや、とにかく向こうに送りこんでしまひさえすりゃ、三円の金が握

れるんだと思うと、彼はまた急に元気が出た。
まもなく新しいタイヤがきちんとはいった。

「さあ、これでよし。」

と、彼はよくれた手でひたいの汗をふいた。

それからいつものようにほかの車輪を一通り見まわった。ところがタイヤが古いとよくあることだが、リーヤ・ホールのチューブがやられていることを発見した。

こいつは困ったと彼は思った。もう予備がないからどうすることもできなかった。これはずしでチューブをすっかり修繕するとなると、どうしたって一時間以上かかってしまう。

運転手は、あたまをかきながら、恐る恐る客席のドアをあけた。

「だんな、まことに申しわけありませんが、まだだいぶ時間がかかるんですけれど。……なあに、一つだけだと思っていれば、二つやられていますんでね……」

しかし客は横になったまま、なんとも答えなかった。
「だんな。……もし、だんな。……だんな。」

ステップにかた足をかけて、中をのぞくと、運転手はぎょっとして思わずあとずさりした。

三

客はただ寝ているのではなかった。

ちらと見ただけではあるが、うつ伏せに倒れているぐあいや、足の突っ張りようが、決してただごととは思えなかった。

彼はこわごわ近づいて、もう一度ステップに足をかけて、そつと中をのぞきこんだ。やみに慣れ

た目には、ルーム・ランプの乏しい光も、まぶしいほどきらきらした。

客は左を下にして、やや斜めに突っ伏して、今にもシートからころげ落ちそうな、ぶざまな格好をしてぶっ倒れていた。顔はクッションのはしに埋まっているために、ちいさいライトの投げかける光のしまのそとにあった。けれどもシックイのように青じろいその色は、うす暗い中につめたく鬼気を帯びていた。さらに驚いたことには、赤い絹いとのようなものが、もじやもじやとこんがらかって、口のまわりからみついていることだった。

毒を飲んだんだな。

運転手のあたまにはすぐそう響いた。

そういえば乗る時から、すでにへんだった。ことばといい、歩きつきといい、どうもあたりまえの人のようではなかった。しかし酔っているんだと思っていたもんだから、彼はべつに気にもとめなかったが、してみると、あの時もう飲んでいたのかしら。

が、毒を飲んだのなら、苦しんだり、もがいたりしそうなものだが、彼はハンドルを握っていたあいだ、そういう声を聞かなかった。それともバンクを直しているあいだに苦しんでぶっ倒れたのだらうか。とにかく、いつのまにこんなことになったのかわからないが、何しろ困ってしまった。「だんな。……もし。だんな。」

彼はもう一と呼んでみた。

しかし、答えはもとよりなかった。

彼はどうしていいかわからなかった。医者に行こうにも車が動かないし、破れたチューブをつくらうには、時間がかかった。いや、時間はどうでもいいとして、ま夜なか、死人のそばでチューブの穴なんか、とてもふさいでいられるものではない。

、おりから一台の自転車がすうと横を通り過ぎた。

「もしもし。もしもし。」

彼は大きくて呼びとめた。

しかし車上の人はいり返りもしないで、行き過ぎてしまった。

あたまの上で、エノキのおお枝がざわざわと鳴っていた。

あたりを見ると、それらの大木の幹は、まるで死者を迎えに來た亡者の行列のように、白くやみの中に突っ立っていた。

彼はからだじゅうがぞくぞくしてきて、なんということなしに、警笛をブウブウ鳴らした。

が、だれも出てくるものはなかった。さっきのようにうまく通りがかりの人でもあればいいのだけれど、時間が時間だから、そんなものはひとりもなかった。

「ここはいいとこなんだ。」

自分で運転してきたのではあるが、こっちはほうにはめったにやってきたことがないだけに、さっぱり見当がつかなかった。さっき馬橋（まばし）？の交番のところを左に曲がつてから、かなりやってきたと思うが、道はばの広いところから祭すると、たぶん五日市街道（いつかいちかいどう）に出たんだらう。だが、このあたりはなんというところかしら？

運転手は、じっとしていられなかった。彼はこわさをまぎらすために、むやみに警笛を鳴らした。けれども「ぼう」というどうも声が、むなく暗やみの中に飲みこまれてしまうだけで、鳴らしたあとの寂しさは、たとえようがなかった。それだけならいいが、自分のすぐうしろに死人が横たわっているのだと思うと、急に背すじのあたりが寒くなってきた。

突然、何かを決心したもののように、彼は急にヘッド・ライトを消して、もと來た道のほうへ、